



江夏美好（えなつ みよし）

大正12年 岐阜県に生まれる。

日本文芸家協会会員。「東海文学」主宰。

主な著書 『下々の女』（田村俊子賞受賞）

『流離の記』『脱走記』『炎昼』

『檻の中の女』『阿古女のうた』他

もがり笛

一九七五年十二月五日第一刷発行

著者 江夏美好

装幀者 尾崎正憲

発行者 稲垣喜代志

発行所 風媒社

名古屋市中区上前津二ノ九ノ一四 久野ビル

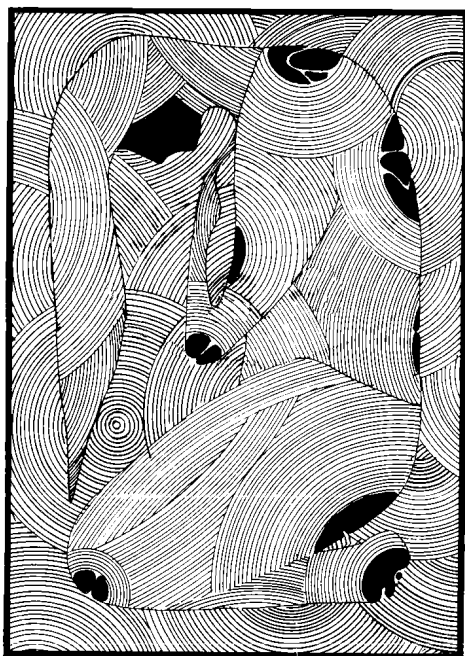
電話・名古屋052(331)0008

振替・名古屋5616

印刷 日大印刷

製本 中部製本

■落丁・乱丁本はお取換え致します。



目次

踊る町 7

耳のない男 91

夜あけ 151

雨の夜の幻想 159

梅の春 173

悲しき老兵 191

もがり笛 205

も
が
り
笛

踊る町

旅 人

むかし昔、竜がすんでいたという竜谷町は、川の上流にあった。

川は、やがて木曾川にそそぐ支流のひとつ、まるで玉藍をとかしこんだほど美しい群青色で、ゆたかにやさしくながれていた。

町は、川ぞいに帯状にひらけ、新緑のインパネスにくるまれていた。もともと町とは名ばかりで、桑畑と材木置場のあいだに、草ぶきや板屋根の点綴した聚落である。

明治三十三年——。梅雨あけの街道を、黄色い繊維状の埃をまきあげながら、馬車が町にはいつてきた。

馬車は日に一往復、川下の代官町から午まえにやってきて、午すぎにかえって行く。代官町はもと幕府の直轄領地で、維新までは代官所があったところ、山国の辺鄙とはいえ、竜谷町とはくらべものにならない殷賑ぶりであった。

「あんななおぞくたい石ころ道を、がたくさゆすぶられてみい。尻ひんむけるほど痛いわな」
「一円札だして、おつりにくれる一錢玉は、尻ひんむいた弁償金やそうな」

と、人々という。土地の人たちは四里の峠道を、草鞋がけでてくてく歩く。九十九錢という、めつぽう高い馬車代を口にせず、歩くよりも時間がかかるというのである。

したがって馬車に乗る客といえ、役場づとめや、材木屋の親方、藏商人などで、月に一度は太物屋も、反物の大風呂敷かついで乗ってくる。客がなくて、空車のまま往復することもあった。

馬車の停留所は町の入口。この日、馬車の客は四人であった。

まっ先に高齒の下駄を鳴らしておりてきた客は、宗匠頭巾をかむり、被布をまとった小柄な老人であった。つづいて、よれよれの着物と袴に、うすよごれた山高帽をかぶった男。髭のいかめしいのは、役場づとめのせいであろうか。三番目は、盲縞の着物にフランネルのシャツをのぞかせ、腿引ばきの尻はしおりで、松葉杖をついた貧相な顔だちの男であった。

しんがりに、ゆっくり馬車をおりたのは、白羅紗の中折帽子に、うす茶の洋服、洋服と同色のよくひかる靴をはいた紳士である。片手にもった細身の蝙蝠傘はステッキがわりで、片手には黒革バンドのついた行李をさげている。町で見かけたことのない顔であった。

彼は、たいしていそぐでもない、確実な足どりで歩きはじめた。歩きたびに行李が鳴る。まあたらしい柳の編目のきしむのは、なかみのおもさのせいであろう。ハイカラな洋服姿の彼は、一見、舶来の上等小物をあきなり商人のような印象でもあった。

たしかにこの男、高村恭平は旅人であった。旅人は、まず宿をさがさねばならない。そこで彼は、松葉杖をついた男に追いついて声をかけた。

「この町には、宿はありませんか？」

男はだまって道の行手を、松葉杖でさししめした。口をきくのも大儀そうである。

道の両がわは桑畑をはさんで、二軒、三軒と、庇のひくい家がならんでいた。また桑畑のなかに、山からひきだした材木がのさばりかえっていたり、荒けずりの角材が、うずたかく積みあげられたりしている。つーんと鼻をつくのは、ひき裂いた木の香と馬糞の臭みである。遠くまた近くで、はっし、はっしと、活気にみちた、ちような（手斧）の音が、澄んだ空気をふるわせていた。

高村はこの町に商人宿のあることも、ちよつと気のきいた旅館のあることもしっていた。彼がこの町にくるのは、これで三度目であった。はじめは二十数年まえ、鉾脈をさがして、山から山へとわたり歩く山師と一緒にあった。そのころは、農事片手間の養蚕が、唯一の収入源というまじしい村であった。

二度目におとずれしたのは三年まえであった。草を枕に野に臥す少年時代の流浪のなかで、たった一度おとずれたこの村の、素朴で親切な人々のことがわすれられなかったからやってきたのであつ

た。

三年まえには、昔の面影がなかった。そしてさらに三年たったいま、町の活気はひとときわさかんになっている。

この町は木材の町であった。木材の積みだしは、もっぱら川を利用する。代官町には小規模ながら、曲物、塗物加工の木工場も、数年まえに建った。そこへ送りこむには、馬にもひかせた。道にボール紙のように、かたくなわいて敷きつめているのは、車輛におしつぶされた馬糞である。

やがて高村は、にぎやかな通りにでた。縄のれんをさげた居酒屋、駄菓子屋、ランプの火屋ほやから下駄の鼻緒まであきなる雑貨屋、一膳めし屋などが、軒をならべている。店番はたいいてい老人であった。

満値の上下で一喜一憂し、いそがしいばかりで実益のすくない夏蚕を飼うのは、もはや道楽仕事のひとつであった。屈強な男たちは出稼ぎに行き、山にはいつて働いた。女たちは、川をさかのぼってひらいた田畑にでて働く。町なかのこの本通りがにぎわうのも、日がおちてからである。

高村は、一膳めし屋にはいり、

「まだ、支度ができとりませんので」

と、亭主にことわられた。粗末な卓には、先客の残骸の井があり、蠅が黒くたかっていた。どうやら彼の身なりを点検して、亭主はだしたい井を遠慮したようである。

「いや、どこかに宿はないでしょうか？」

「へーえ、宿ですって？」

めし屋の隣りが宿であった。三年まえ、彼の泊った大黒屋である。

「ああ、上等の方なら、もうちいっと行って橋をわたったところにありますでな」

札をのべて店をでた彼は、数軒先の居酒屋のまえで、縄のれんをくぐってでてきた老人にばったり出会った。馬車で一緒の小柄な老人である。高村は、めし屋できいたとおなじ質問を、丁寧にうかがえた。

「それなら、そこんこの橋のねきにある、舎旅館ぐらいのもんでござります」

「やまよしですね」

方角がおなじだと、ならんだ老人は高村の肩までもなかった。下駄をひきずるように鳴らしながら、

「ところで、その舎の隠居というのが、なかなかの偏屈者でしてな。壮士あがりの舶来ぎらい。洋服を着られたお客さんなら油断は禁物。いくら寝首をかかれんでもないという話ですぞ」

「ほう、それはなかなかおもしろいじゃありませんか」

舎旅館は、川つぶちにあつた。新館は三年まえにはなかったものである。山の町にしては、瀟洒な感じの、こじんまりした二階建であつた。

老人は親切に玄関のなかまで案内してくれた。法被に手を通しながらでてきた男が、
「あ、だんな。おかえりなさい。くたびれなさりましたじゃろう」

「はい、お客さまじゃ。はよう荷物をもってあげんかい」

びっくりしてつつ立っている高村に、老人はまえ齒のまるでない口をあけて笑った。

「どうやら、私が寝首をかかれそうだな」

「いやはや、どうもとんだ失礼を……」

彼は法被の男に、新館の二階へ案内された。

「こんなところで、祭りか盆でないとお客さまもこられません。それで、お風呂もわいてませんで、ちょっとまわって下さい」

「祭りや盆は、にぎわう？」

「へい、そりやもう……。この盆踊りはおもしろいというて、代官町ばかりか、どうかすると遠い越後や越中方面からまで、もの好きな見物衆がおいでになりましたな」

「じゃあそれまで滞在したいものだな」

「盆まで？ めっそうな。ここの盆は九月一日でして、まだ二カ月も先の話ですから」

百姓男然とした番頭は、浴衣をすすめてで行った。高村は宿の浴衣は着ず、バンド行李から、自分の着物をだして着た。

やがて茶菓の盆をささげた女をしたがえ、この家の隠居兵右衛門が挨拶にきた。被布はぬぎ例の頭巾をかぶったまま、筒袖着物に、紺の前垂れをしめている。

「ほう、これはこれは……」

隠居は客の和服姿に眼をほそめた。

「まだ寝首をかかれとうありませんからね」

菱立小紋の柄ゆきも品のよい、鉄色の薩摩上布に、細の染出献上の博多帯は、彼の小肥りしたからだ、色白な顔によくうつた。

「女中は祭りと盆のときだけ、町の娘衆にたのんでいますんで、ご用の節はこの娘に……。わしの娘で、里枝といひます」

隠居のうしろにひかえていた小柄な女が、折目正しい辞儀をした。ととのった顔だちの女である。眼がおおきい。きりつとした眉のあたり、険とも憂いとも見える翳が刷いている。たつぷりした黒髪を、流行のまかれ糸むすびに結っている。この束髪はおもに娘のものであるから、娘だとすれば、三十近い年増である。婚期のおくれたのも、険とも憂いとも見える翳がわざわざしたのであるうか。

「すこし滞在させてもらいたいのですが」

「どうぞごゆるりと。で、町になにかご用がおありで？」

「まあ、いろいろと……」

口をにごして高村は、空気がうまいといった。

「空気だけでしての。なんの馳走もなく、じき倦きられてしまいますわい。魚といえば、うぐい、岩魚、鮎くらい……。それに雨が降ると、空気までがこやし臭くていけません」

「平気ですよ。私も四国の田舎育ちですから」

「いいところじゃそうですね。わしも四国へ一度は行きたいとおもっております。遍路になって、八十八カ所の霊場めぐりが念願で」

「ご信心ですな」

「とんでもない。根っからの信心ぎらいですが、お遍路で霊場めぐりをするには、ぜにがいらんときてますんでな」

二人は声をあわせて笑った。

彼は拾円紙幣をとりだした。当分滞在の宿賃だといった。隠居は顔色をかえた。

「あんたさん、めっそうな。こんな大金をどうしましょうぞ」

「いや、根っからの風来坊でしてね。いつ気がかわって出立せんでもないんです。よぶんはそのおりにかえして下さればよろしい」

もし、長逗留した場合の不足金は、そのつど請求して下さいという彼に、隠居はしばらく首をかしげていた。やがて、畳に這いつくばって幾度も辞儀をした。

頭巾

翌日から高村恭平は、朝な夕なに町を散歩した。町にでるとき、宿の浴衣を着なかった。着がえ

も幾枚かもってきている。金目のかかった上物ばかりで、田舎町の人々の眼を見ひらかせるに、じゅうぶんであった。

「あのひとは、どこぞのお大尽か、それとも、もと大名の御曹子とでもいうんかな」

「そんな大尽が、なにしにござったろう？」

「あるいは胸の病氣療治やろか」

「いいや、顔の色つやもよいし、よう肥っていて、病人とはおもえんな」

などと、人々は噂した。

純朴とはいえ、山国の人間は排他的精神に富んでいる。警戒心も強い。それが日ならずして、高村恭平に好意的になっていった。もっとも、彼がいつも些細な努力をつづけるがための、収穫なのであった。

たとえば——彼は居酒屋にも、ふらっと立ちよった。

「私はあまりのめないんですがね、こうした店の気分がとても好きですよ」

と、店の亭主をよるこばせついでに、そこに居あわせた山男たちに、気まえよく酒をふるまうのである。

また、往来で泣いている子供をあやし、一厘玉ひとつにぎらせる。荷車をひいている百姓女が、傾斜のくぼみに車をはめこませてこまっているのを、手伝ってやりたりするのである。とてもお大尽ではできない芸当であった。逆にまた、お大尽だからこそ、いい洋服を着たハイカラ紳士が、手